

研究の窓

個人主義の社会的視野



馬場啓之助

さきごろロブソンの『福祉国家と福祉社会』を読んでみて、個人主義の社会的視野といった問題について考えさせられた。

かれは福祉国家が福祉社会に支えられることの重要性を説いているのだが、福祉社会を構築するためには伝統的な知恵のなかにも訂正を要するものがあるとして、政府は個人のために存在するといった個人主義的信条などは再検討しなければならないと指摘している。再検討の方向としては、権利を主張するだけでなく、これを責任によって裏打ちしなくてはならないといった、しごくもっともな提言をしているのだが、福祉政策の推進者として著名な老大家からイギリスの個人主義的信条についてこういう提唱がなされると、いささか戸惑いを感じざるをえない。それというのも、わたしたちはイギリスの個人主義は広い社会的視野をもち、その自由主義は社会的責任に裏打ちされているものであると教えられてきたし、わたし自身もそう信じてきたのだが、それが再反省を要求されるとあっては、わたしたちの考えてきたイギリスの個人主義は著しく美化されたもので、実体はそうではないことになるからである。

しかしながら 19 世紀後半に始まり 1940 年代のビバリッジの改革にいたるイギリスの福祉政策の展開は、たしかにその個人主義思想がゆたかな社会的視野をもっていただけからこそ可能になった。これは現代史の顕著な事実であり、いまさらこれを否定すべくもない。ロブソンの指摘が正しいとすれば、イギリスの個人主義思想のもつ社会的視野に変化が起こったとみるほかはない。

変化は、組織が個人と社会とのあいだに介在して、その重要性を著しく増大することによって起こった。組織を個人に分解して、問題を個人と社会の関係として組み立てるならば、それは自由と平等を座標軸として展開させていくことができよう。その場合には、イギリスの個人主義思想のなかに形成された解法ははなはだ有用なものとなろう。それはナショナル・ミニマム解法にほかならない。機会の平等を保証して、個人の活動の自由を解放し、公正な競争をおこなわせ、その結果生じた不平等については、それが機会の不平等に転化しない範囲において、これを容認する。そしてこの範囲を画するものがナショナル・ミニマムである。このミニマムの範囲内において平等でなくてはならないが、これを超える分野では自由である。この解法こそイギリスの個人主義思想の社会的視野が生みだしたものと言えよう。

しかしながらこの解法のなかには、組織の重要性が十分に考慮されていないように思える。個人の活動といっても、現代の社会においては多くは組織の一員としてのそれであり、その要求も組織を場としなくてはほとんど実現の道をとざされている。そうであれば、問題は個人・組織・社会の三面的関係に即して展開していかなくは実際に適用しにくくなるのではないと思われる。個人主義の社会的視野がその処属する部分集団組織に限局されて、全体の社会組織にまで及ばないおそれがあるからである。ロブソンが福祉社会構築の要件のひとつとして、個人主義的信条の再反省をあげたのも、個人主義思想の社会的視野の変貌に注目したからであると、わたしは解釈したい。それはかれがこの要件と並んで、組織内部の民主化を徹底させよとか、労使間の賃金交渉における安易な妥協がインフレ加速のかたちで社会的費用の転化がおこなわれることを警戒していることを併せ考えると、この解釈は正しいように思う。それにしても、問題を三次元で考えるとなると、ナショナル・ミニマムの線をどこにひくか、その決定に困難さが加わることを最後に言い添えておこう。